様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：６２５０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｈ００７８９

研究課題名（和文）文化の主体的継承のための民俗誌の構築ーマルチメディアの活用と協働作業を通じて

研究課題名（英文）Constructing ethnography for the Inheritance of Cultural resources : Utilization of Multimedia and Collaborative Works

研究代表者
川村　清志（kawamura, kiyoshi）

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・准教授

研究者番号：２０４０５６２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、日本の地域社会が失いつつある生活文化の諸相を持続的に継承し、活用するための基盤となる、マルチメディアを用いた民俗誌を作成することにある。ここでは文化の担い手とそれらを記録、表象する研究者が協働で地域文化の継承と活性化を目指した。そのために文字情報はもちろん、画像や動画を用いてネット上での公開も視野に入れた民俗誌実践による研究の発信を試みた。研究者と現地の人びととの対話と協働を通して、多様な価値観と視点を内包し文化の担い手が主体的に選択し、積極的に継承、活用しようとする持続的で更新可能な文化表象の構築を推進した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の主な目的は、地域社会の人々と研究者が文化についての価値観を共有し、新たな文化を共創することにある。その学術的意義は、フィールドサイエンスにおける一方向的な情報収集から双方向的な知識の共有へと研究分野の視座を変換し、印刷媒体はもちろん、映像作品やインターネットを通じて、研究領域の展開を促進させたことである。
　このようなフィールドでの実践は、トップダウン式に研究成果を還元する既存の社会科学のあり方から、地域社会との対話と協働を前提とするフィールドサイエンスの応用的な側面を拡張しえた。これにより自己表象としての地域文化の多様性を地域内外の人々に周知する契機になり得たと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to create a multimedia ethnography that will serve as a platform for the sustainable inheritance and utilization of the various folk cultures that are being lost in local communities in Japan. Here, the bearers of culture and the researchers who record and represent them work together to pass on and revitalize local culture. To this end, we will attempt to disseminate research based on folklore practices, using not only textual information but also degital images and videos, with a view to making them available on the Internet. Through dialogue and collaboration between researchers and local residents, we will promote the construction of sustainable and renewable cultural representations that include diverse values and perspectives, that are proactively selected by the bearers of culture, and that are actively inherited and utilized.

研究分野：文化人類学

キーワード：協働　民俗誌　文化継承　マルチメディア　映像民俗誌

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、このプロジェクトに先立ち、日本の複数の地域社会においてフィールドワークを行ってきた。それらの地域では、調査の基礎となるインタビューと参与観察と並行して、画像撮影による記録やビデオカメラを用いた映像記録、さらに映像民族誌の作成も行ってきた［川村 2016、川村 2021a］。またインターネットの普及とともに現地との仮想上の往来も盛んとなった。このようなマルチメディアの利用による地域調査をより総合的に行う必要性を感じるようになったわけである。

もう一つの大きなモチベーションは、地域の人々における文化概念、文化へのアクセスの仕方の変容であった。かつての人類学や民俗学では、文化という抽象的な概念を扱うのは研究者の側であり、当該地域の人々にとってそれらは、半ば無意識的な慣習的実践であると位置づけられていた。しかし、代表者の数十年間にわたる調査のなかで体感したことは、現代の日本社会で文化を語る作法は、決して研究者だけのものではなく、調査対象とされる社会の側の様々な立場の人たちによって、ときには積極的に、ときには戦略的に実践されるものであるということであった。

とりわけここで重要なのは、しばしば研究者と調査地の文化の担い手をつなぐ人々の存在であった。このような立場の人々が ときには地域文化の断片化された部分をのり付けして研究者に示したり、逆に地域社会の側に無意識的な慣習を意識的な文化財（資源）として表象する術を提示したりすることがわかってきた。このような多層的な社会構造の中で、文化概念が更新され、そこで担い手たちの間にも様々な意識の変化やズレが生じてきたと考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本の地域社会が失いつつある生活文化の諸相を持続的に継承し、活用するための基盤となる、マルチメディアを用いた民俗誌を作成することにある。この研究の意義として、①人類学、民俗学の民俗誌記述における理論的、倫理的な課題の克服、②現代的メディア状況に対応した民俗誌実践の試み、③地域社会への持続的な文化支援という側面を持っている。民俗誌は、対象とする社会の生活文化を全体的に記録することを目的としている。本研究では、日本の地域社会において研究者と現地の人びととの対話と協働を通して、多様な価値観と視点を内包した、自己表象としての民俗誌を共に創出する。文字情報はもちろん、画像や動画を用いてネット上での公開も視野に入れた民俗誌であり、人びと自身が主体的に選択し、積極的に継承、活用しようとする文化についての更新可能な—メディアを通じて文化実践を上書きできる—記録の構築を目指す。

３．研究の方法

本プロジェクトは、文化人類学、民俗学の基本的な研究スタイルであるフィールドワークに基づくものであるが、次の点で、既存の研究スタイルを更新するものとなる。そもそも、既存のフィールドワークでは、対象とする社会でのインタビューと参与観察にもとづく一次資料を基礎として民俗誌を作成し、当該社会の文化的特質を描きだすことを目的としてきた。そのためには地域社会での長期的、継続的なフィールドワークを通して、話者たちとの信頼関係（ラポール）を構築することが前提とされた。ただ実際の研究調査で民俗誌が整理される過程では、常に研究者による統合的な視線が支配的となってしまう。本研究は、このような研究者による一方向的な表象を是正し、地域社会にとっての文化の位置づけとその内実を継承者との協働作業を通して構築していくことを方法論的な特質としている。

同時にここで調査の手段と文化表象の方途として用いたのが、マルチメディアであることも特質としてあげられる。文化人類学や民俗学、社会学では、多くの写真や映像を用いた研究が行われてきた[分藤、村尾、川瀬編 2015、秋山、小西編 2016]。現状のマスメディアを批判的に扱う研究［飯田、原編 2005］や、映像人類学が初発において現地の人々との共同作業で成立し得たことを指摘する研究の蓄積もある［村尾、久保、箭内編 2014］。同様に近代初期に日本の地域社会を映像として残した事例についても注目されつつある［宮本、佐野、北村他編 2016］。しかし、インターネットを含めたマルチメディア社会である現代日本において、これらの点を含み込んだ研究はほとんど実施されてこなかった。研究代表者は、これまでの調査研究活動から両者の理論と実践を統合的に捉えることで、既存の文化概念の更新を計りつつ、地域文化の継承と再創造に向けた営みに寄与できると考える。

その具体的な調査地として、当初は石川県輪島市、宮城県気仙沼市、同県七ヶ浜町、兵庫県明石市、沖縄県宮古島を設定した。また、研究分担者との連携研究として、北海道白老町や鹿児島県屋久島、同じく鹿児島県のトカラ列島を視野に入れており、研究プロジェクトの後半、実施に移す予定であった。しかし、2020 年から日本全体を巻き込んだコロナ禍のためにほとんどの地域での現地調査が実質的に不可能となった。とりわけ致命的であったのは、実際に参与観察を予定していた祭礼や民俗芸能が、2020 年以後、休止状態に追い込まれたことであった。そこで、当該地域では、既存の映像や画像資料のアーカイブズ化を行うとともに、本研究プロジェクトに沿った代替の調査地域として石川県珠洲市、沖縄県沖縄市、沖縄県黒島地域の調査を実施した。

４．研究成果

１）主な成果について

研究の初年後から３年目までは、プロジェクトはほぼ予定通り推移しており、また、研究成果も順調に提示することができた。

ここでの成果の大半は、長年にわたって調査研究を継続し、現地とのラポールを築いてきた石川県輪島市七浦地区での事例が多くを占めている。まず初年度には、地域を代表する夏祭りである皆月山王祭についてまとめた『輪島市皆月日吉神社山王祭 フォトエスノグラフィー 準備編』を刊行した。続いて 2020 年度にはその続編となる『輪島市皆月日吉神社山王祭 フォトエスノグラフィー 祭日編』（図１参照）を刊行した[川村・倉本編 2018、2021]。これらのブックレットでは、これまでの調査過程で撮影した画像、並びに地元の青年会員やその親族、つまり、祭りを継承する主体が撮影した画像を用いて、祭りの準備期間と祭礼当日の民俗誌を作成している。製作の段階では、選出した画像からページレイアウト、解説部分やキャプションの全てを、地元の青年会役員とその OB たちとメールや SNS で共有し、編集作業を遂行していった。とりわけ元皆月青年会長である倉本啓之氏には、準備編では各章の内容についてのアドバイスと文章校正を依頼し、祭日編では、本文とコラムの両方で執筆を分担してもらうことになった。この成果は、本プロジェクトのテーマとするマルチメディアを多用しつつ、現地との協働作業を実践する民俗誌の一つの範型となるべきものと考えている。

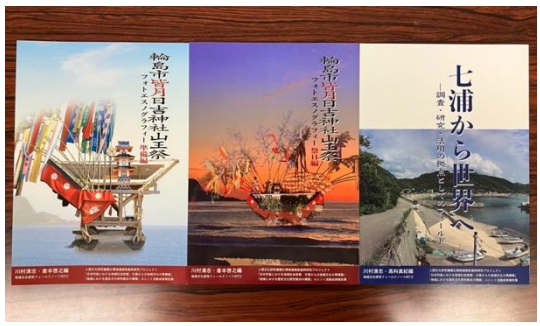

図１ ブックレット成果物

また、輪島市門前町においては、地域との連携の柱として、地元の公民館との文化についての持続的な実践を目指して活動してきた。研究プロジェクトの期間中にも 2019 年、2020 年、さらに 2022 年にも地元が主催する「文化のつどい」という催しに参加し、講師を務めたり、シンポジウムのプロデュースを行なったりした。また、その一方で、公民館が主催する地元の民謡を中心としたイベントである「お小夜まつり」では、自らが参与観察を含めて祭りの実施に協力し、準備から当日を含めたイベント活動に寄与してきた。これらの活動のなかで具体的な成果としては、2019 年に実施したシンポジウム「七浦から世界へ」を編集したブックレットがある（図１参照）。このシンポジウムでは、申請者を含めてかつて門前町の七浦地区を中心にフィールドワークを行った者とその指導者がかつての研究調査を反芻しつつ、地域社会における文化の意味について再考するという企画であった。会場では安井真奈美、手塚恵子、川村清志（研究代表）とかつての指導教官である小松和彦を交えて、研究者と地元のかつての話者たちが集い、各々のフィールドとテーマに沿って地域文化を論じた［川村、高科編 2022］。

さらに、2020 年から 21 年にかけては、輪島市門前町七浦地区の地域文化を一般に紹介し、その成果を視覚化するためにフォトエッセー『曳山に集いて 明日を見つめて』を３回に分けて『REKIHAKU』誌上に連載した［川村 2021b,2021c、2021d］。ここでは皆月山王祭の他に同じ皆月地区と五十洲地区に継承され、国の重要無形民俗文化財に指定されるとともに 2018 年にはユネスコの無形文化遺産にも登録されたアマメハギという来訪神儀礼、さらに次項でも紹介することになる皆月地区の春祭りを紹介した（図３）。

特にここで注目したのは、地域という概念を相対化するべく、地元を離れて生活する皆月青年会員にもスポットを当てた点である。彼らは、普段は都市部に生活しており、地域の成員としては限定的なつながりしかもたない。しかし、彼らの生活の中では祭りや年中行事など特定の文化が、故郷との紐帯を結ぶものとして自覚的に選択されている。このような緩やかな地域との繋がりに現代における地域文化継承の可能性を見出した。

さらに本プロジェクトとしてはイレギュラーな事態であったコロナ禍が地域社会に与えた影響についても検証することになった。研究者だけでなく出郷者たちも、地元との往還が制限されて、祭りや民俗芸能の実施が困難になるなかで、その距離を埋めるために SNS やズームなどのメディアを利用していったからである。研究者がフィールドワークを補足手段として用いるだけでなく、当事者自身の文化継承にマルチメディアが活用されているわけである。これらについての議論は、第 16 回無形民俗文化財研究協議会の場で、「今、映像記録に求められること」と題して発表し、後に報告書にまとめられることになった［川村 2022］。

２）映像民俗誌とモバイル展示について

次にマルチメディアの活用という視点から、映像民族誌の制作とそれを基盤とした博物館展示の生活について紹介する。

2020 年度には、国立歴史民俗博物館のプロジェクトとの共同で移動式の展示ユニットであるモバイル展示を制作し、テーマの一つとして輪島市皆月の事例でこれまで言及してこなかった同地域の春祭りに焦点を当てた。春祭りについては 2016 年から継続して撮影してきた映像資料を 2020 年度に再編集し、地元の青年会とのズームでのやり取りと補足的な映像記録を編集して作成した。春祭りは、2007 年から地域の高齢化により人手不足と行事の負担軽減のために神輿の渡御が休止されていた。

図 2 映像モバイル展示

以上の様子をモバイルのユニットとして制作し、4 台の小型のモニターを使って、各年代を同時に視聴できるようにした。また、4 台目のモニターには、祭りの復活を促し、映像の中にも中心的に登場している青年会役員たちに当時を振り返ってもらい、それらが全体のナレーションとなる構成を意図した（図 2)。その後、これら春祭りの映像を再編集し、約 20 分の映像作品を制作した。この「春祭りをもう一度」は、『東京ドキュメンタリー映像祭 2020』に応募し、また YouTube 上でも期間限定で公開を行った。

もう一つ、皆月については別の映像に関するモバイル展示も制作した。それは、皆月の刺し網漁の親方の家に残されていた 16 ミリフィルムのデジタル化映像に関する展示である。これらの映像は 2016 年に発見され、17 本のフィルムがあることが確認された。このプロジェクトを契機として、全ての映像をデジタル化して地元に還元するとともに、地域の文化として共有する方途を探ることになった。フィルムは所有していた家の屋号にちなんでショウゴロウフィルムと呼称している。撮影されたのは、戦前の 1930 年代後半から 1950 年代中期にかけてと考えられる。映像の多くは家族の姿や浜仕事、祭り、小学校の運動会など地元、皆月の風物が記録されていた。それ以外にも能登の白米千枚田と思しき風景や、金沢からの車窓の風景、市内のネオン街など地域外部の風景と思しき様子も記録されていた。モバイル展示では、地元での共有を意識して、地域内の過去の映像からイワシ漁の船の進水式、地域内の夏と冬の風景、夏祭り、小学校の運動会を選別し、各々を 3 分以内のフッテージに再編集して紹介することにした。

さらに宮城県七ヶ浜町では，地域の団体や東日本大震災以後の NPO 活動に従事していた人たちとの協働作業のもとに震災以後の文化復興に関する映像民俗誌の制作を進め、「震災の記憶をつなぐ―あの日の僕、七ヶ浜 3.11―」として完成させた。この映像は 2016 年の 3 月 11 日に七ヶ浜町で行われた震災 5 周年記念のイベントとそこで披露された防災のための紙芝居「あの日の僕―七ヶ浜 3.11―」の映像記録を編集して制作したものである。そもそもこの紙芝居は、地元の有志が代表者と連携研究者である兼城糸絵をアドバイザーに迎え、七ヶ浜の震災の記録を集めつつ、自らの震災経験を交えながら、ワークショップを繰り返しつつ制作したものであった。この作品の DVD を制作するとともにこれまでのフィールドワークと震災以後の営みについてのインタビューを整理したブックレットを付与して地元に還元している。

そのほかの映像制作として、当初計画にはなかったが、福島県いわき市における民俗芸能、「じゃんがら念仏踊り」の現地調査とそれに基づいた映像フッテージを制作した。こちらは、国立民族学博物館にて 2021 年 3 月 4 日から 5 月 18 日にかけて開催された特別展「復興を支える地域の文化―3.11 から 10 年」の展示にて公開された。じゃんがら念仏踊りは風流系の太鼓踊りで、福島県の南部を中心に継承されてきた。毎年のお盆に喪中（新盆）となった家から故人を偲んで家ごとに踊りが依頼される。本来、プライベートな行事であるうえで、コロナ禍の只中であったため、行事の開催自体が不透明な状態にあった。現地調査についても直前まで調整を重ねることになったが、「大久自安我楽継承会」の代表の遠藤諭氏と会員の協力によって、2020 年 8 月 13 日に実施されたじゃんがらの様子を映像記録として残すことができた。

「大久自安我楽継承会」は、いわき市の久之浜を中心に活動する団体で、創立は平成になってからである。この年は、会員が自分たちで作成したフェイスマスクを被り、地区の人たちとも距離をとりながら、19 軒の家でジャンガラを踊った。映像では、市内の一般家庭でのフェイスシールドを装着しての踊りの様子や、東日本大震災後の復興住宅での踊りの様子などを 2 分半の映像にまとめて制作した。コロナ禍という危機的な状況であっても継承される民俗文化を検証するための貴重な映像資料であると考える。

３）その他の地域での研究活動

石川県輪島市での事例を踏まえつつ、文化の仲介を行う、地元の文化財行政の経験者や郷土史家、民俗文化の保存会の役員たちとの文化の共創作業についての研究調査とそこでの課題についてまとめておきたい。既に述べたように 2020 年以後、宮城県気仙沼市、兵庫県明石市、沖縄県宮古島での調査はほぼ実施することができなかった。

宮城県気仙沼市については，地域の文化として表象される気仙沼市波板地区の虎舞と早稲谷

地区の鹿踊りに注目しつつ，それらの文化財化に尽力したキーパーソンとの協働作業のもとにサスティナブルな文化継承のあり方についての調査を行う予定であった。これらの行事が 2020 年以後休止に追い込まれたため、これらを市の文化財指定に尽力した元気仙沼市職員、S 氏の聞き取り調査と同保存会の前会長へのインタビューを中心とした映像記録の文字起こしを実施した。これらの映像記録は、コロナ禍以前に撮影されていたものである。

兵庫県明石市でも 2020 年以後、祭礼行事が休止されていたため、実地での調査ができなかった。2022 年に 3 年ぶりに行われた祭礼の調査を行い、祭りの核となる獅子舞保存会の参与観察と保存会の前会長の K 氏からのインタビューを行い、文字起こしを進めている。

沖縄県宮古島についても，地域の伝統的な祭祀組織の保存継承に尽力しているキーパーソンである S 氏との協働作業を模索したが、感染状況が好転しない宮古島での調査は、最終年度まで困難であった。そこで 2021 年度からは沖縄県の写真家で宮古島の祭礼の記録写真でも知られる比嘉康雄のアーカイブズ作業を促進しつつ、沖縄文化の記録と保存に携わる写真家たちのシンポジウムの記録映像を撮影し、編集作業を行った。比嘉康雄のアーカイブズは、彼が残したフィルムやプリント類だけでなく、実際の調査・撮影作業過程を記した膨大なフィールドノートが存在する。比嘉のような存在は、文化の仲介者であるとともに画像メディアによる文化表象を行った存在として、本プロジェクトの中心的なテーマとして検証すべき存在である。その成果の一端は、連携研究者である高科真紀によって行われている［高科 2021a、2021b］。

沖縄については、同県町黒島について、かつて国立歴史民俗博物館で制作された映像民俗誌「黒島民俗誌」の再検証も行った。「黒島民俗誌」は、1993 年に民俗学者の篠原徹が監督を務めた映像民俗誌である。作品が制作されてから 30 年の月日が立ち、映像に描かれた島の景観が歴史的な資料となりつつある。そこで表象された生活文化を再考し、文化表象の仲介者としての民俗学者の役割を再考するために、作品の未編集映像を再検討しつつ、現在の黒島の調査へとつなげた。幸い黒島への渡航が可能となったため、最終年度には実際に黒島での調査を行うことができた。今後、この事例も含めて記録映像を作成しつつ、協働の民俗誌を検証する論文を作成する予定である。

参考文献

秋山裕之、小西公大編 2016『フィールド写真術』古今書院
飯田卓、原知章編 2005『電子メディアを飼いならす―異文化を橋渡すフィールド研究の視座』せりか書房
川村清志 2016『明日に向かって曳け 石川県輪島市皆月山王祭の現在』（DVD102 分）国立歴史民俗博物館
川村清志 2021a「民俗誌映画が語る地域の文化力―『明日に向かって曳け 石川県輪島市皆月山王祭の現在』から―」『継承される地域文化－災害復興から地域創発へ』臨川書店、pp.54-78
川村清志 2021b「曳山に集いて、明日を見つめてー輪島市門前町皆月山王祭」『REKIHAKU』1
川村清志 2021c「曳山に集いて、明日を見つめてー皆月のアマメハギ」『REKIHAKU』2
川村清志 2021d「曳山(ヤマ)に集いて、明日を見つめて―祭りの明日へ」『REKIHAKU』3
川村清志 2022「今、映像記録に求められること」『映像記録の力―危機を乗り越えるために―：第 16 回無形民俗文化財研究協議会報告書』、pp.15-22
川村清志・倉本啓之 2018『輪島市皆月日吉神社山王祭-フォトエスノグラフィー 準備編』国立歴史民俗博物館
川村清志・倉本啓之 2021『輪島市皆月日吉神社山王祭-フォトエスノグラフィー 祭日編』国立歴史民俗博物館
川村清志・高科真紀 2022『七浦から世界へ–調査・研究・活用の拠点としてのフィールド–』国立歴史民俗博物館
川村清志・兼城糸絵 2022『震災の記憶をつなぐー七ヶ浜町「あの日の僕、七ヶ浜の 3.11」』
高科真紀 2021a「写真メディアを軸とした沖縄祭祀アーカイブズ:写真家・比嘉康雄資料を事例に」『アート・ドキュメンテーション研究』29、pp.3-16、
高科真紀 2021b「地域の記憶とアーカイブズ：民間所在資料調査の現場から 」『REKIHAKU』4、pp.84-86
分藤大翼・村尾静二・川瀬慈編 2015『フィールド映像術 』古今書院
村尾静二、久保敏、箭内匡編 2014『映像人類学（シネ・アンスロポロジー）―人類学の新たな実践へ』
宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄他編 2016『DVD ブック 甦る民俗映像―渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った 1930 年代の日本・アジア』岩波書店

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 川村清志	４．巻 20
２．論文標題 民俗文化の表象批判からその実践へービジュアル・メディアの可能性と課題	５．発行年 2020年
３．雑誌名 比較日本文化研究	６．最初と最後の頁 57-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川村清志	４．巻 1
２．論文標題 民俗誌映画が語る地域の文化力－『明日に向かって曳け　石川県輪島市皆月山王祭の現在』から－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 継承される地域文化－災害復興から地域創発へ	６．最初と最後の頁 54-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川村清志	４．巻 1
２．論文標題 曳山に集いて、明日を見つめてー輪島市門前町皆月山王祭	５．発行年 2021年
３．雑誌名 REKIHAKU　特集・されど歴史	６．最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川村清志	４．巻 2
２．論文標題 曳山に集いて、明日を見つめてー皆月のアマメハギ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 REKIHAKU　特集・いまこそ、東アジア交流史	６．最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川村清志	4．巻 3
2．論文標題 ヤマに集いて明日を見つめて3ー祭の明日へ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 REKIHAKU 特集・日記がひらく歴史のトビラ	6．最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川村清志	4．巻 16
2．論文標題 今、映像記録に求められること	5．発行年 2022年
3．雑誌名 映像記録の力―危機を乗り越えるために―：第16回無形民俗文化財研究協議会報告書	6．最初と最後の頁 15-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高科真紀	4．巻 29
2．論文標題 「写真メディアを軸とした沖縄祭祀アーカイブズ:写真家・比嘉康雄資料を事例に	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アート・ドキュメンテーション研究	6．最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24537/jads.29.0_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高科真紀	4．巻 4
2．論文標題 地域の記憶とアーカイブズ：民間所在資料調査の現場から	5．発行年 2021年
3．雑誌名 REKIHAKU	6．最初と最後の頁 84-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計4件

1．著者名 川村清志，倉本啓之	4．発行年 2020年
2．出版社 国立歴史民俗博物館	5．総ページ数 136
3．書名 輪島市皆月日吉神社山王祭-フォトエスノグラフィー 祭日編	

1．著者名 兼城糸絵，川村清志	4．発行年 2021年
2．出版社 国立歴史民俗博物館	5．総ページ数 52
3．書名 あの日の僕ー七ヶ浜3.11ー	

1．著者名 川村清志・倉本啓之	4．発行年 2018年
2．出版社 国立歴史民俗博物館	5．総ページ数 96
3．書名 輪島市皆月日吉神社山王祭　フォトエスノグラフィー　準備編	

1．著者名 川村清志、高科真紀	4．発行年 2022年
2．出版社 国立歴史民俗博物館	5．総ページ数 109
3．書名 七浦から世界へー調査・研究・活用の拠点としてのフィールドー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	内田　順子 (uhida junko) (60321543)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授 (62501)	
研究分担者	岡田　浩樹 (okada hiroki) (90299058)	神戸大学・国際文化学研究科・教授 (14501)	
研究分担者	柴崎　茂光 (shibasaki shigemitsu) (90345190)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・准教授 (62501)	削除：2020年9月18日

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	高科　真紀 (takashina maki) (10723207)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・特任助教 (62501)	
連携研究者	兼城　糸絵 (kaneshiro itoe) (40709482)	鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授 (17701)	
連携研究者	中井　精一 (nakai seiichi) (90303198)	同志社女子大学・表象文化学部・教授 (34311)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関